

A BRAND NEW CHAPTER @KOCHI  
TOSABUSHI

# とさぶし



No  
34



TAKE FREE

飾ってくれた、祝ってくれた

# 節句の記憶。



# 節句の記憶。

飾ってくれた、祝ってくれた

桃の節句にはひな人形を、端午の節句にはこいのぼりとともにフラフヤのぼりを立てて  
子どもたちの健やかな成長を願って祝う、日本古来の節句文化。  
そこには、この風習を通して紡がれる、人々の温かい思いがあった。



## 連載

- 読者プレゼント……………P23
- 集落を訪ねて……………P22
- プライムトーク……………P20
- 日曜日のTOSAレシビ……………P18
- 土佐が語り継ぐ祭……………P16
- 絶景にて人と出会う……………P14

## 特集

- 飾ってくれた、祝ってくれた  
節句の記憶……………P03
- 懐かしい節句の思い出……………P04
- フラフに夢を乗せて……………P06
- 約束のこいのぼり……………P09
- 代々受け継がれてゆく「ひな祭り」……………P10
- 世界でたった一つのひな人形……………P12

## とさぶし34号の登場人物



高知県神道青年会  
会長の甲藤壽一さん



「十川体育会」の  
仲治幸さん



「ハチロー染工場」の  
三谷隆博さん



「近森人形」の三代目  
近森範久さん



前浜のエンコウ祭り実行  
委員長の高木貞夫さん



「アオイコーポレーション」  
の代表・楠目和本子さんと、  
ひな人形職人・中田佐由  
利さん



「吉川染物店」の五代目  
吉川毅さん



土佐市にお住いの  
大野文子さん



ポリマークレイ作家の  
あぎやまひろみさん



「仁淀アドベンチャー」の  
神澤識大さん



「佐竹染工場」の  
佐竹将太郎さん



「ギフトのさとう」七代目の  
妻・佐藤倫与さん

今でも心に残る 節句ストーリー

# 懐かしい節句の思い出

子どもたちの健やかな成長を願って 人形を飾る、日本古来の節句文化。  
幼い頃に人形を飾って祝ってもらった思い出は、大人になり祝う側になった時にこそ、鮮やかによみがえるもの。



## 桃の節句

節句の思い出

50人以上もお祝いに来てくれてね。娘の初節句は母親に七段飾りを用意してもらい、親戚や近所さんが盛大に祝ってあげたくてね。

### 親戚、近所で盛大に！ 子どもの健やかな成長を願って...

孫娘である智加ちゃんの初節句には、親戚一同で健やかな成長を願い、ホテルの会場でおきやくを開いた。智加ちゃんの前には、自宅より持参したおびなとめびなが座る。

#### 思い出の持ち主

大野文子さん、智加ちゃん  
男児・女児、2人のお子さんの成長を願い節句文化を大切にきた大野さん。現在はお婆ちゃんとして、お孫さんのお節句を祝う。

宮中の結婚式を模したひな人形には、天皇皇后両陛下のような幸せな結婚ができますように...、そんな願いが込められ、嫁入り道具の一つとして嫁ぐ家が用意する。そんな日本古来の習わしを親から受け継ぎ、子へ孫へと伝える大野文子さん。娘さんの初節句に母親からもらったひな人形は、娘さんが二十歳になるまで、健やかな成長を願って飾り続けた。「私は終戦直後の生まれで、お節句どころじゃなかったから、子どもや孫のお節句は盛大に祝ってあげたくてね。娘の初節句は母親に七段飾りを用意してもらい、親戚や近所さんが50人以上もお祝いに来てくれてね。

嫁入り道具ほどたくさんお祝いの品を頂いて、今でも思い出とともに大切にしています。初節句にはのぼりや飾り人形などを親戚の間で贈り合っては、そのたにおきやくをして、子どもたちの無事な成長を願うという大野さん一族。「節句の贈り物が届いたらおきやくを開いて招待するのが務めですから」と、薄れゆく昔ながらの行事を今でも重んじる。「節分がすぎ満ち潮に向かう大安のようなお日柄の良い日に、ひな人形を飾るといいですよ。そして、ひな祭りが終わったら婚期が遅れないように早くしなすう」そんな習わしも大切にしているとお話してくれた。



## 端午の節句

節句の思い出

近森さんとともに育った人形は戦国時代の武将・織田信長をかたどった、人形作家・辻村寿三郎の作品。「自分を守ってくれた大切な人形なので今でも飾ります」と近森さん。

#### 思い出の持ち主

近森範久さん

人形専門店を営む「近森人形」の三代目。毎年欠かさず、端午の節句と桃の節句には、人形を飾って節句を迎える。

「人形が災いを受けてくれるおかげで子どもが健やかに成長する。それが節句に人形を飾る元来の意味なんです」。そう言っていて自身の人形を見せてくれたのは、近森人形の三代目を務める近森範久さん。物心付いた頃から季節行事として日本に根を下ろす「七草・桃・端午・七夕・菊」の五節句を祝い、端午の節句には毎年人形を飾り、しょうぶ湯に入って体を清めて、ちまきを食べ厄を払う、そんな伝統的なお家で育った。「私が県外の大学に進学して家にはいない間も、端午の節句には毎年欠かさず人形を飾ってくれていたんです。大人になってふと振り返った時に、そのありがたみをしみじみと感じました。気付けば、自分がしてもらったことを子どもたちが好む好まざるに関わらず、してあげたいと思うようになっていきました。そして、そう思っている自分を見た時に、やはり節目折りに家族で節句を祝うことは大切だと、改めて感じました。自身の経験を胸に、息子さんにも幼い頃から節句の持つ意味を伝えてきたという近森さん。そんな近森さんの家庭ではいつの頃からか、クラブの試合など勝負の前になると、息子さんが「人形を飾ってほしい」とお願いしてくるようになっていたという。

### 代々五節句を重んじて... 受け継がれてゆく 節句文化と家族の絆

に、そのありがたみをしみじみと感じました。気付けば、自分がしてもらったことを子どもたちが好む好まざるに関わらず、してあげたいと思うようになっていきました。そして、そう思っている自分を見た時に、やはり節目折りに家族で節句を祝うことは大切だと、改めて感じました。自身の経験を胸に、息子さんにも幼い頃から節句の持つ意味を伝えてきたという近森さん。そんな近森さんの家庭ではいつの頃からか、クラブの試合など勝負の前になると、息子さんが「人形を飾ってほしい」とお願いしてくるようになっていたという。



家族や親戚が見守る中、あいさつをする佐藤恵一さん・倫与さんご夫妻。当時贈られた高砂人形は今も「ギフトのさとう」店頭飾られている。

たっていない時だったが、両家がゆつくり膝を突き合わせ話ができる機会となり、改めて「本当によって良かった」と振り返る。「いろんな事があった10年を経て、白髪のお人形にもだんだんと愛着が湧いてきました。今でも時々、嫁節句の内祝いに「ご注文を頂くことがあります。私が、私はもちろん自分の息子が結婚する時にはしてあげたいし、その次、またその次と、この風習と意思が繋がっていいなと思います」。

## 土佐の伝統節句 嫁節句

「白髪になるまで末永く、仲むつまじい夫婦であってほしい」との思いを込めて、高知では昔からよく行われてきた嫁節句。体験者が語る当時の記憶、つないでいきたい思いとは。

結婚して最初の桃の節句のお祝いに行われる「嫁節句」。「夫婦仲良く共に白髪のできるまで」との思いを込めて、長寿と夫婦円満の縁起物である高砂人形を贈り夫婦の門出を祝うというもの。そんな高知で見られる風習を実際に体験したのが、安芸市で創業173年の老舗「ギフトのさとう」の七代目の妻・佐藤倫与さん。夫の恵一さんと結婚したのは平成21年で、その翌年の3月に安芸市で嫁節句が行われた。「結婚するまでこの風習のことは全く知らなかったのですが、日本文化を大事にするところへお嫁に来たんだと実感しました」。嫁節句には、倫与さんの両親、兄弟らの家族、恵一さん側の家族や親戚ら20人ほどで宴席の場を持った。結婚式から半年も

# フラフに乗せて



## ハチロー染工場 はちろーそめこうじょう



## 空になびく大きなフラフを未来に



1 ハチロー染工場の工房。平成元年ごろには、年間で700枚を超えるフラフが作られた。2 香美市や香南市では、伝統的に巨大なフラフが作られてきた。風にはためく音まで豪快。3 二代目・三谷仁志さん。初代八郎氏が残した原画を大切に引き継ぎ、現役で活躍している。

### 代表取締役 三谷隆博さん

明治35年から続く紺屋の家に生まれる。職人仕事はもちろん、現在では「フラフらしいデザイン」の企画も手掛け、フラフが節句のシーズンだけでなく日常的に受け入れられるように提案を行う。

●ハチロー染工場 香美市土佐山田町楠目76 ☎0887-53-2276

とりわけフラフの文化が根強い、香長平野。物部川の豊かな水を利用できたため、かつては染物屋もたくさんあり、土佐湾から吹いてくる強い風を受けて大空でダイナミックにはためくよう、巨大なフラフが作られてきた。ハチロー染工場の三代目・三谷隆博さんにもまた、祖父から大きなフラフを

贈ってもらった思い出がある。「長辺で7mはありましたね。他にも近所の家や親戚筋から、何枚もフラフをもらって。この辺りでは、そんなふうにはフラフを贈り合っていたものです。節句の時は、そこかしこでフラフがなびいていましたね」。ハチロー染工場の特徴は、極彩色の色使い。赤の隣には黒な

ど、鮮やかでメリハリがある原色の世界を描き、そこで桃太郎や金太郎といった豪快なモチーフが踊る。「父からは、こじんまりとした染めにならないよう、大胆に、と学びました。フラフは元気を与えてくれます。フラフを見上げて、上を向いていきましょう」と話してくれた。

1 三布(みの)と呼ばれるサイズのフラフ。現在はタペストリーなども作成。2 現代の名工である父・登志之さんと作業。登志之さんは晩年まで作品の製作を続けた。3 娘さんがデザインして毅さんが描き上げた、干支をモチーフにした作品を展示。4月からは絵金蔵で行われるフラフの企画展にも作品を出展。



## 吉川染物店 よしかわぞめものてん



## 父の人柄のように 人を明るくする作品を

「フラフ作りが忙しくて、正直自分の節句の思い出がないんです。まとも祝ってもらえてなかったかもしれない」と苦笑するのは吉川毅さん。「吉川染物店」の五代目として生まれ、若干10歳の頃からフラフ作りの手伝いを始めた。「学校から帰って夜中まで手伝ってお小遣いが500円。割りに合わない」と子ども心に感じながらも、「息子



としてではなく一人前の男として扱われたことがうれしかった」と当時を振り返る。「父は放任主義でフラフ作りも特に習ったことはない。けれど、職人の心構えをはじめ学ぶことは多かった。そんな父の「土佐の伝統文化を残したい」という思いを受け継いで約30年、染色技術や力強い墨線を用いる画風を踏襲しつつも、柔軟に新しいことを取り入れながら活動してきた。当面の目標は「人を明るくするような作品を生むこと」。「コロナ禍でつらい日々を送る中、見て和んでもらえるようなものを作りたい。明るい性格でみんなに好かれた父のような、そんな作品を」。

### フラフ職人 吉川毅さん

創業130年余を誇る染物店の五代目であり、平成23年「土佐の匠」に認定。フラフやのぼりのほか、県内で唯一の継承者として土佐風作りも行う。年に2度展覧会を行い、伝統にとらわれない斬新な作品も発表。

●吉川染物店 香南市香我美町岸本56 ☎0887-54-2528

端午の節句にこのぼりと並んで、五月晴れの空にはためくフラフ。土佐伝統文化として、代々受け継がれたフラフ作りを行う職人を訪ねた。

「こいのぼりの川渡し」の由来

# 約束のこいのぼり

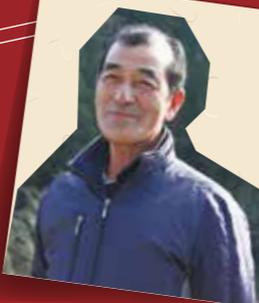
四万十町

「子どもたちの健やかな成長と清流四万十川を守る」、そんな目的のもと昭和49年に始まった「こいのぼりの川渡し」。そのルーツをたどると、青年と少年が交わした「一つの約束」があった。

直線約630mの川幅を往復約1300mのワイヤーを使い、こいのぼりをつるす。テレビ放映がきっかけで全国各地からこいのぼりが集まるように。



最近では近隣の保育園児が現在の会場「こいのぼり公園」に散歩で訪れ見学していくのだとか。これからも多くの町民の支えにより、約束が守られ続けるのだらう。



語り部  
仲 治幸さん

第3回開催から主催者の一員となり、平成9年に行われたアメリカとカナダの国境「ナイアガラ川」での開催にも参加。「こいのぼりの川渡し」を通じて、四万十町の名をPRしたい。

暖かな春の陽気に包まれる4月中旬、四万十川では咲き誇る花々に負けず劣らず色鮮やかなこいのぼりの群集が姿を見せる。まるでコイが空を泳いでいるかのような雄大な光景が話題を呼び、今では全国各地で開催されるようになった「こいのぼりの川渡し」。発祥の

## 春の訪れを告げるこいのぼりと世代を超えて受け継がれる約束

地である四万十町十川（とわか）地区で、そのルーツをたどると十川体育会の青年が少年と交わした「約束」があった。始まりは、十川体育会が指導するスポーツ少年団で練習をしていた子どもたちの一言がきっかけとなった。「最近では僕らあ

大きくなったが、家でこいのぼりを揚げてくれん。いじけているかのようにも取れるこの発言を聞いた青年が「じゃあ、おんちゃんたちが揚げちゃう」と約束を交わした。船で川を渡り、川を挟んだ山々にロープを結ぶ。そこに1本のロープは2本に増え、対岸へのロープの受け渡しをラジコンやドローンが担うようになるなど、準備はより効率的な方法に生まれ変わってきた。だが、変わらず残り続けているのはこいのぼりに込めた「子どもたちの健やかな成長を守る」という思いと、こいのぼりを楽しみに待つ子どもたちの姿。あの日少年と交わした約束は40年以上守り続けられ、成長した子どもが次世代の子どもへ、先輩から後輩へと受け継がれてきた。



## 佐竹染工場

さたけぞめこうば

「赤ん坊の頃、祖父が張り切つて僕のフラフを作ってくれていたと聞きました。写真を見れば、染色もモチーフも商品で作っている物とは、まるで違いましたね。」そう語るのは、佐竹染工場の八代目、佐竹将太郎さん。伝承によれば、佐竹家は室町時代に中村（現在の四万十市）を開いた二条氏に

付き従い、京都からやってきた細屋の家筋。現在は、大漁旗を中心に手掛ける地元唯一の染物屋だ。そのフラフの特徴は、単色に塗り上げられた目の覚めるような背景色。それも全てがむらなく均一に染められており、とても美しい。「この技術だけは、親父から口酸っぱく教えられました」と話す将太

郎さんも、「そんな親父も僕の息子に張り切つてフラフを作ってくれた。まだ名前も決まっていなかったのに」と笑う。「この先、僕も孫ができたら、きつと張り切つてフラフを作りませうね」。フラフ職人もまた、孫のために張り切るおじいちゃんになる。伝統の技と一緒に、気立ても受け継がれていく。



①均一な背景色が特徴の佐竹染工場のフラフ。細かい部分でも素早く塗らなければ、塗りにむらが発生してしまう。②しっかり染めるため、最終的に生地と染料の重量はとても重くなる。全ての工程が手作業。③大空にはためく佐竹染工場のフラフは、青空を背景にすれば、何といっても存在感が違う。

## 八代目 佐竹将太郎さん

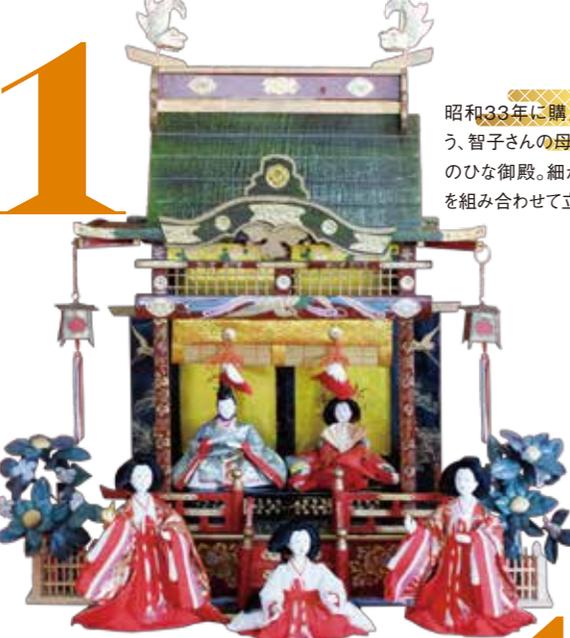
四万十市中村で代々続く佐竹染工場の八代目染物職人。近年では、女の子や都会のマンションでも飾ることができる新しいフラフを提案。また、将来の後継ぎとなる娘さんの夢も応援している。

●佐竹染工場 四万十市中村京町4-23 ☎0880-35-2419



技と共に受け継がれる気立て

1



昭和33年に購入したという、智子さんの母・澄子さんのひな御殿。細かいパーツを組み合わせて立てる。

2



智子さんの市松人形。父が転勤族だったこともありひな壇ではなく人形を選んだのだそう。



現在一番新しいのは6歳の梨花ちゃんの立ちびな飾り。お顔の輪郭が細いのも現代ならでは。

6

2番目に新しいのは9歳の柚陽ちゃんの三段飾り。こちらも鮮やかなデザインの現代風。



5

紡がれる90年の歴史

# 代々受け継がれてゆく「ひな祭り」

約90年、五代にわたって受け継がれる数々の人形。時代とともに人形の顔や着物のデザインも変わり、時の流れを肌で感じることができる。次の世代にバトンを渡す、孫たちに寄せる思いとは。

4



趣味で集めた人形コレクション。手作りの物や旅先で見つけた物など個性豊かな面々。

3



県内の雑貨屋さんで見つけたというガラスでできたひな人形。大きさはわずか1cmほど。

7

智子さんの祖母・正子さんの高砂人形。17歳で嫁いできたそうで、人形は昭和初期の物。



平成2年に購入したという智子さんの長女の七段飾り。おひなさまの顔がふっくらしてかわいらしい。

8

受け継がれてきた人形と願いを次の世代へ



の光景はまさに壮観。人形の顔の形や着物のデザインもさまざままで、ひな人形を通して時代の移ろいを肌で

香美市香北町藤野にある西野家では、毎年2月に入るといよいよひな人形を奥の座敷に飾るのが恒例行事。案内してくれたのは「株式会社わらびの」の代表で、ここ西野家の長女として生まれ育った畠中智子さん。古い物では、智子さんの祖母に当たる正子さんが嫁節句の時に贈られた高砂人形から、智子さんの市松人形、お嬢さんと姪、それぞれの七段飾り、孫の三段飾りと立ちびな飾り、他にも趣味で集めたといういろんな人形が所狭しと並び、そ



西野ファミリー

畠中智子さん

西野澄子さん

西野菜奈子さん

西野柚陽ちゃん

西野梨花ちゃん

感じることもできる。「元々、それぞれの家に飾っていましたが手狭になり、それだったら本家にみんなのを飾って一度に見られるようにしたらということで、20年以上前からこのスタイルになりました」。今年は旧正月に合わせて2月に親戚の集まりがあり、座敷でひな人形を見ながら思い出話にも花が咲いたとか。また、女の子の孫たちは小学生と年長さんになり、説明書を片手に飾り付けを手伝ったのだそう。「自分たちのお人形もあるということだんだん理解してきたようです。大人になるまでこの記憶が残り、毎年ひな人形を飾る習慣を後世にもつないでほしい」と大人たちは願っている。





開始

- 1 人形の大きさ選び
- 2 衣の生地を選ぶ
- 3 西陣織の金襴を選ぶ
- 4 衣装合わせ
- 5 お顔を選ぶ



おひなさまの大きさは大小5種類。七段飾りに飾る大きなタイプから、手のひらサイズの物まで、住居の大きさに合わせて選べる。



ピンク・オレンジ・赤など、色とりどりの生地をパーツの数だけ選ぶ。めびなは十二単を着ているため、選ぶ生地数も多い。



めびなの衣装には西陣織の金襴を使う。絹糸に金箔を巻き付けたあてやかな「金襴」に心踊る瞬間。手持ちの着物帯の持ち込みもOK!



めびなの装いが決まったら、おびなの生地を選ぶために衣装合わせ。少しずつ、完成イメージが湧き、出来上がりが待ち遠しい。



おびな・めびなとともに、人形の表情や髪型、大きさもさまざま用意。人形の大きさや衣装、好みに合わせて選ぶ。

ひな人形ができるまで①



めびなで40種類以上のパーツを裁断。一つ一つミシンで縫い合わせていく。人形の衣装はパーツが小さいため作業も細かい。



赤・黄・オレンジ・ピンクに紫など色とりどりの衣に、西陣織の金襴を使ったあてやかな衣。縫い合わせた十二単の数、十種類以上。



ワラ・木毛(もくめん)を用い、針金を駆使して作った胴体は、どっしりとした安定感が特徴。そこに襟元、袴、十二単の順に着せていく。



白襟から唐衣まで一枚ずつ衣装を着せていく。襟元、袖元の絶妙な重ね技はミリ単位。熟年の職人技が必要となる。



首元にお顔を装着したら出来上がり。おびなも同様の作業で行われるが、めびなの製作に比べると工程は4分1以下。



ひな人形ができるまで②

# 世界でたった一つのひな人形

300種類の生地からひな人形ができるまで

Make for you!

女兒の無病息災を願って桃の節句に飾るひな人形。そんな日本古来の習わしを重んじ、三世代にわたって昔ながらの製法で一つ一つ手作りするひな人形工房を訪ねた。

アオイコーポレーションの代表・楠目和子さんと、この道25年のひな人形職人・中田佐由利さん。新作となる真っ赤な衣装の「還暦雛」と共に、「60歳の還暦に無病息災を願う還暦雛を作ってみました」と自信作を披露してくれた。



素材選びからお客さまに寄り添い、工程一つ一つに思いを込める。

「お祖母さまの形見の着物帯を使ってひな人形を作る方もいらっしゃるんですよ」、そう言って工房を案内してくれたのは「アオイコーポレーション」の代表・楠目和子さん。昭和43年に「雛人形」として創業。代々家業として行ってきたひな人形作りを継承し、現在は同社の人形事業部で、2人の職人と共に、ひな人形作りの伝統を守り続ける。工房に並ぶのは、西陣織の金襴などをはじめめとする、300種類以上に上る色とりどりの生地。その中から、好みの色柄素材を選んで自分だけのオリジナルひな人形を作ってくれる全国でも数少ない工房。色とりどりの十二単を着たおひなさまともなると、選ぶ生地や小物も十人十色で、出来上がった人形は二つが个性的。「自分が選んで作ったおひなさまが一番。そう言って喜んでくれるんですよ」と楠目さんは頬を緩める。

今では大量生産による機械化が進むひな人形作りだが、ここでは、ワラや木毛(もくめん)、針金を使って胴体や手足を作るところから始まり、何十種類ものパーツを裁断し縫製して組み合わせていくという、気の遠くなるような作業が職人の手によって進む。「無病息災を願ってひな人形を飾る」という元来の意味を大切にしながらこそ、代々引き継がれた昔ながらの製法にこだわり続けている。



まだ見ぬ「仁淀ブルー」が広がる溪流

# 中津溪谷

絶景にて  
人と出会う

Spot  
12

中津溪谷は、高知県有数の清流・仁淀川に注ぎ込む美しい峡谷。「仁淀ブルー」を楽しむことができる観光スポットとして有名で、虹を生む滝や水流が作り出した石柱があり、紅葉シーズンには整備された遊歩道をたくさん観光客が歩く。令和2年、そんな中津溪谷で、初のキャニオニングツアーが始まった。案内するのは「仁淀アドベンチャー」の神澤識大さんだ。

神澤さんが川の魅力に目覚めたのは大学時代。オーストラリアで体験したラフティングをきっかけに、ガイドの道を志し、海外で経験を積んだ。国内では有資格者が少ない「CIC（国際キャニオニング協会）」の認定資格も取得。その後、高知県の吉野川で働きながら独立先を探していたところ、中津溪谷に行き着いた。「パツと見た時、「ここでやりたいな、かっこいいじゃん！」と感ずるものがありましたね」。彼の心を動かしたのは、その独特な溪谷美だ。中津明神山を源流に、澄んだ水が流れる中津溪谷は、欠けにくいチャートの地層。豊富に流れ

## 世界で経験を積んだエキスパートが中津溪谷に非日常の光景が訪れる者を感動させている

る溪流の力を受け続け、峡谷の表面は滑らかに形成されている。確かに自然の造形物だが、まるでテーマパークの造形物のように、気分を盛り上げる非日常の感覚を味わうことができる。神澤さんは「これはいける」と感じた。

準備を進めながら、地元仁淀川町が管理する旧校舎のシェアオフィスを借りると、中津溪谷でキャニオニングを行うに当たって、役場はもちろん、地元住民の元にも足を運んだ。そして、令和2年の3月には、最初のツアーを実施。その後は「コロナ禍に入るが、天候に恵まれた最初の夏は大盛況のうちに過ぎていった。キャニオニングに苦手意識がある人でも安全に遊べることも喜ばれた。神澤さんは「中津溪谷は前半後半で景色が変わってきます。最初は水に慣れたり、ジャンプして遊んだら。しかし、溪谷を抜けていくにつれて、より雄大な、非日常の光景に入っていけるんです」と話す。まだ見たことのない中津溪谷が、そこには広がっている。

仁淀川のアクティビティを盛り上げたい!!



仁淀アドベンチャー 代表  
かみざわのりひろ  
**神澤識大さん**

昭和62年生まれ、埼玉県出身。大学時代にオーストラリアでラフティングの魅力に目覚め、20代はニュージーランドやカナダで、ガイドの経験を積む。高知県でも吉野川でガイドを務めたのち、仁淀川の中津溪谷の素晴らしさに触れて、令和2年1月に仁淀川町へ移住。「Niyodo Adventure」を設立。

ファンも多い「仁淀ブルー」の人気スポット・中津溪谷。そこで初のキャニオニングツアーが始まったのは令和2年のこと。案内するのは、世界で経験を積んできたエキスパートのガイド。まだ見ぬ非日常の光景が広がる、新しい「仁淀ブルー」で遊ぶため、中津溪谷を訪れる冒険者を待っている。

江戸時代から続く子どもたちの祭り

# 前浜のエンコウ祭り

●大湊公園周辺  
●6月5日(土)※令和3年の開催は未定

他県のかっぱに相当する水の妖怪「エンコウ」を祭り、水難事故防止を祈念するお祭り。平成23年3月に国の記録作成の措置を講ずべき無形の民俗文化財に指定されている。



慰労と感謝の念を込めた供養祭

# 人形供養祭

●鏡川みどりの広場  
●5月11日(火)※12日の人形供養は関係者のみで行う

役目を終えた人形やぬいぐるみを供養する日本独自の文化として古くから根付いており、その歴史は室町時代までさかのぼる。現在も全国各地のお寺や神社で行われている。



# 土佐

# が語り継ぐ

# 祭り

古き良き伝統文化を後世に伝えるべく奔走する祭り人たちの思いや胸の内に蓄まる!



### 役目を終えた物に感謝の意を

毎年5月の端午の節句が過ぎた頃、高知市の「鏡川みどりの広場」には、トラック2台分にも及ぶ多くの人形やぬいぐるみが集まる。一見すると異様ともいえる、この光景。訪れる人は皆、感謝の意を表し、人形やぬいぐるみを預けて立ち去っていく。こちらの行事は、今年で26回を迎える「人形供養祭」。県内の若手神職が所属する「高知県神道青年会」が、社

### 古くから言い伝えられる妖怪

毎年6月の第1週目の土曜、南国市の「大湊公園」では、水難事故防止を祈念する「エンコウ祭り」が開催される。エンコウとはかっぱを表す言葉。この地域では古くから「こんな(夕暮れや大水の)時に川へ行きよつたらエンコウに川へ引っぱり込まれるぞ」と言い伝えが残されており、現在も近隣の保育園で紙芝居を通じて子どもたちに語り継がれている。この祭りのルーツをたどれば、江戸時代までさかのぼるという説もあるが、実はそれも定かではない。と、いつのも「エンコウ祭り」の主役であり、主体となつて動くのは子どもたち。つまり文献としての記録があまり残っておらず、先輩の背中を見て後輩たちに受け継がれていったのだ。

## LINEでも情報配信中!



### とさぶし

と友達になろう!

① QRコードを読み込み「とさぶし」と友達になる



② 記事の閲覧やプレゼント応募、最新情報を受け取れる



### 地域性を培う伝統文化

「祭りの準備は1ヶ月も前から始まる。なんせ子どもたちだけで準備するから、2・3日じゃ間に合わない、そう話すのは幼少期に祭りを楽しみにし、現在は実行委員長を務める高木貞夫さん。最年長の「大将」を中心に小学生から中学生までの子どもたちが、夕暮れ時から軒軒家を回り寄付を募り、川沿いの雑草を刈り清掃活動を行ったり、背丈を越すほど伸びたシヨウブを取ったり、さらにろうそくに火をともしちょうちんの設置までを

会貢献のために何かできることはないかと考えている時に、「長年心を和ませてくれた人形を破棄するのは忍びない」「畏れの気持ちから粗末に扱うことができない」という地域住民の思いを聞き、始まった。子どもが成長して飾らなくなったひな人形や不要になったぬいぐるみなどを預かり、翌日、高知県神社庁でおはらいをし、人形に宿る魂が安らかに浄化できるように思いを込めてたき上げる。こうして、炎とともに空に上がった魂にお別れをするのだ。「人形供養祭」は、日本独自の「全ての物に魂が宿る」という考えが反映された、日本人らしい行事といつても過言ではないだろう。

### 人形供養祭と高知県神道青年会

「大事にしてきた人形を粗末



高知県神道青年会 会長 甲藤 壽一さん

にできないという皆さまの優しい思いをくみ、安らかに浄化するようにと思いを込めて供養していきます」。そう話すのは高知県神道青年会会長の甲藤壽一さん。毎年300件以上の持ち込みがあるという高知県神道青年会主催の「人形供養祭」は、目的の一つに「明日の郷土を担う子どもたちの健やかな成長」を掲げている。そのため、供養料の一部を児童施設に支援基金として贈呈し、昨年は子ども食堂の運営に使われた。子どもの成長に寄り添い続けてきた、かけがえのない存在だからこそ、冥福を祈念して見送りの時を迎えてはどうだろうか。



前浜のエンコウ祭り 実行委員長 高木 貞夫さん

高知市

日曜日



300年以上の歴史を誇る日曜市。全長1kmの範囲に300軒以上のお店が並び、1日に1万7000人もの来場者を集める。そのうち半数以上が県外客であり、定番の観光スポットとして知られている。昨年規制緩和され、16店舗までは火器を使った出店が認められるように。

会場 / 高知市追手筋  
☎ / 088-823-9456  
(高知市産業政策課)

農作物や伝統工芸品が並び、売り手と地元民のお客さんが会話しながらかつり買いをする。かと思えば、県外客や外国の方がお土産物の購入やその場で買ったフードやドリンクを楽しむ…、そんな風景がそこかしこで展開されている現在の日曜市。昨年行われた四半世紀ぶりのルール改正による現在の日曜市。昨年行われた四半世紀ぶりのルール改正による現在の日曜市。昨年行われた四半世紀ぶりのルール改正による現在の日曜市。



「カツオ餃子 徳吉丸」の餃子は、自社船で釣った鮮度抜群のカツオやニラ、ショウガの素材を生かした味が自慢。



お米はもちろん、マカロニやトウモロコシ、大豆や餅などいろいろな食材をパン菓子にして提供する岡島さん。



自家製トルティーヤにはちきん地鶏や旬の高知野菜を使った具材をサンドする「Masacasa Tacos」のタコス。



キューバサンドやバインミー、ベーグルなどさまざまなパンをそろえる「たねまる」。木曜日にも出店している。

商品や地元のPRを兼ねて出店する個人や団体も多い今の日曜市

前述の通り地元民だけでなく、県外や外国からの観光客も多数訪れている日曜市において、「商品を販売するだけでなく今後のPRの場としても利用したい」と考える出店者も多い。例えば、「山のせっけん屋 西熊家」の西熊さん。「元々自分は奈良県からの移住組で、高知での暮らしに感銘を受けた。何万人もの県外客の皆さんにも高知の素晴らしさを知ってもらいたい」との思いを込めて、高知ならではの素材を使ったせっけんPRや地場産品の販売を通じて圏域全体の経済活性化を目的とした「れんけいこうち日曜日出店事業」のブースも用意されており、県民も知らないディープな地元の名産品や加工品が販売されていることも。新しい物好きが高知県民の好奇心も満たしてくれるようなラインナップとなっている。



「たねまる」、10種類以上ものボン菓子や、見ただけでも楽しい。



自家製の棚田米を使ったおむすびやワッフルなどのスイーツをそろえる「山むすび」。人気はチャーシューと煮卵のおむすび。



人気のジンジャーエールをはじめ、地元の土佐山で育ったショウガを使った商品をそろえる「夢産地とさやま開発公社」。



市場のいろんな場所に構えるれんけいこうちのブース。この日は香南市から出店が、イベントスペースも用意。



イノシシや鹿のラードなどの素材と香美市の湖畔遊の源泉で作る「山のせっけん屋 西熊家」のせっけん。



セメントで手作りした精巧な路面電車やミゼット、グランドピアノ、ミニハウスなどを販売する田中さん。



手順1

サツマイモ、カブ、ヤーコンを5ミリ角に切り、オリーブオイル、塩、コショウで混ぜ、耐熱シートに乗せてオーブンで焼く。

手順2

フライパンにココナッツオイルを入れて5ミリほどに切ったパプリカ、石づきを落としたシメジを炒め、ワイン、バター、塩コショウ、スパイスを加えて味付けする。

手順3

フライパンに油を引き、トルティーヤを焼く。①と②を混ぜた具材やお好みでチーズを乗せる。

手順4

トルティーヤで具材を挟み、お好みのサルサを掛けて完成。トルティーヤやスパイス、サルサなどは量販店やスーパーなどで購入可能。



ロサンゼルスで音楽関係の仕事を行う傍ら、毎日のようにタコス食べていたという都筑さん。帰国&高知移住を機にパートナーの伊藤さんと高知産タコスを提供。

### 好きな野菜を使って 高知野菜のタコス

材料(4人分)

- トルティーヤ.....4枚
- サツマイモ.....200g
- カブ.....50g
- ヤーコン.....50g
- パプリカ.....1個
- シメジ.....1/4パック
- サルサ.....適量
- チーズ.....適量
- 塩.....(手順1) 小さじ1杯、(手順2) ひとつまみ
- コショウ.....(手順1) 小さじ1杯、(手順2) ひとつまみ
- オリーブオイル.....小さじ1杯
- ココナッツオイル.....小さじ1杯
- バター.....小さじ1杯
- ワイン.....小さじ1杯
- スパイス.....各ひとつまみ(オニオンパウダー、ガーリックパウダー、パプリカパウダー)
- サラダ油.....少々

※Masacasa Tacosでは季節の高知野菜を使い、高知の地キビで作る自家製トルティーヤを使った高知産タコスを提供



楠永さんファミリーが切り盛りする「KAYA FARM」。自分で育てた20種類以上もの唐辛子やニラなどを使った加工品やおかずを販売。



## 日曜日のTOSALシビ

規制緩和に伴い出店を始めたお店をはじめ、オリジナリティあふれる商品を取り扱う注目の新店をピックアップ。今回は「タコス」のレシピをご紹介します!

# プライトーク

土佐の文化を受け継ぐ者たち

高知の風土に育まれた「土佐人」たちは  
今日もそれぞれの分野から「土佐の風」を発信  
そこに新たな文化を重ねながら



ポリマークレイ作家  
あきやま

あきやま  
ひろみさん

### 【プロフィール】

昭和58年生まれ高知市出身。パン屋さんなどの勤務を経て粘土細工の奥深い世界を知り、自ら製作を開始。平成26年には高知市上町にアトリエ兼ショップ「Handmade雑貨にこ」をオープン。現在もいろいろな物作りに挑戦中。

あきやまひろみさんが手掛ける作品は、思わずくすくすと笑ってしまうような愛くるしさで、作ることへの愛が感じられる物ばかり。作家活動を続けて約15年、少しずつ変わってきたこと、そして変わらないもの、魅力ある作品が生まれるワケとは。

### ポリマークレイとの出会い 独学で作品作りに没頭

ドイツ発祥の、樹脂で作られたクラフト用粘土「ポリマークレイ」。常温では硬化せず、オーブンで加熱することでプラスチック素材となり、軽くて強くて耐水性のある作品を作ることができる。そんなポリマークレイにあきやまさんが出会ったのは今から15年ほど前のこと。手芸屋さんで手に取った雑誌にポリマークレイで作られた海外の作品が多数掲載されており、その美しさに衝撃を受けた。「どれも見たことないような柄でしたが、金太郎あめのような技法で作られた物を組み合わせていることは分かりました。私も作ってみたいと強く思ったことを覚えています」。しかし、当時は高知はおろか四国でもポリマークレイを取り扱っている店は無く、東京の店に問い合わせようやく手に入れたものの、今度は作り方が分からない。まだネットもそこまで普及していなかった時代ゆえに参考にできる動画なども無く、独学で作っては失敗を繰り返した。元々、子どもの頃から何かに夢中になったら時間を忘れるタイプ。ポリマークレイにもどっぷりハマり、仕事をしながら作品を作り続けて気付けば7年が過ぎていた。そして平成26年にはアトリエ兼ショップをオープンする。

### 周りの声から生まれる作品 そして新たなジャンルへの挑戦

あきやまさんが手掛けるポリマークレイの作品は、その多くに組みあめの技法（金太郎あめのような技法）が取り入れられている。やわらかくなるまで練り込んだポリマークレイを伸ばしたり平らにしてパーツを作り、それらを組み合わせて絵柄や文字を表現。出来栄えは、切っただけのお楽しみだ。「何回作っても、出来上がりが思い通りになったことはありません。でも、切ってみないと分からないところが面白くて、今でも毎回驚かされています」。アトリエ兼ショップには、これまで手掛けてきた数え切れないほどの作品が所狭しと並んでいるが、中でも多いのが高知をテーマにした物。カツオ、文旦、鳴子、はりまや橋、皿鉢など、県民ゆかりの名物があきやま作品ならではの雰囲気を持ってアクセサリーやキーホルダーとなり、贈り物としてももちろん自分用にもと、幅広い世代に大人気を集めている。「私の作品は、周りの方に頂く声から生まれる物が多いんです。できるだけ忠実に作る物と想像で作る物、雰囲気は変わりますがジャンルにこだわらず、楽しいと思う物、自分が好きと思う物を製作することを意識しています」。そんなあきやまさん、実は新たなジャンルの物作りに挑戦中。それは、これまで何千回とポリマークレイで実践してきた組みあめ技法を用いた、本物のあめ作りだ。



右はワークショップでお名前看板を作っている様子。上は高知名物がモチーフになった作品たち。見ているだけでも楽しい。



組みあめ技法で作られた物の他、渦巻きキャンディもあり。ギフト用などオーダーも可能なので気軽にご相談を。



あめ作りのための移動式小屋「キャンディキャビン」。手掛けたのは、高知最大級のマルシェ「village」の村長・山崎早太さん。

### 少しずつ変わってきたこと これからも変わらない思い



FM高知で毎週金曜放送中の番組「プライムトーク」に出演した際のスタジオの様子。あきやまさんの出演回は4月2日、9日の2週にわたってオンエア。

あめ作りスタートのきっかけになったのは、県外で組みあめ技法のあめ作りを間近に見たこと。「この感動をより多くの人に伝えたい」と平成31年1月から本格的に取り組みようになり、ポリマークレイとはまた異なる難しさに試行錯誤しながらあめ作りを続けている。そして令和2年12月にはあめ作りのための移動式小屋「キャンディキャビン」を作ってもらい、これからはいろんな所へキャンディキャビンと共に出掛け、多くの人にあめ作りの実演を見てもらいたいという。「熱を入れられない形や質が変わらないポリマークレイに比べて、あめは熱があるうちに作業をする時間との勝負。似て非なるものですが、切らないと出来が分からない面白さ、ワクワク感は同じです」。ポリマークレイに出会ってから作りたい物は少しずつ変わってきたが、変わらないこともある。それは「その時、その時、自分が一番良いと思う物を作っていく」というスタイル。今はポリマークレイとあめ作りに夢中だが、絵を描くこともずっと好きだし、将来小さな絵本を作りたいという夢もある。「これからも妥協せず、周りの方々に引き出してもらいながら一緒に面白い物を作って楽しんでいきたいな」と思っています。

読者プレゼント

# とさぶしからの贈り物

クイズとアンケートに答えて応募してや!

**クイズ** 長寿と夫婦円満を願ひ、祝い節句とは?

たくさんのお待ちしています。

「とさぶし」からの贈り物

応募締切  
令和3年6月20日

- 読者プレゼントの応募は、1人1回とさせていただきます。
- プレゼントの発表は、商品の発送をもって代えさせていただきます。
- いただきました個人情報はプレゼントの発送のみに使用します。

あきやまひろみ  
アマビエのキーホルダー 5名様

金太郎あめ技法で作られたアマビエのキーホルダー。あきやま作品ならではの愛くるしい雰囲気、見ているだけで温かい気持ちに。全長約7cm・横幅約2.5cm。



近森人形  
コイぐるみ 3名様

ちりめん素材を使ったこいのぼりのふわふわクッション(1個4000円相当)。黒・青・赤の3種類を各1名様に。



近森人形 ひな人形3種 3名様

「磁器ひな飾り」「クリスタル 彩 都びな」「わらべうた」、3種類のひな飾りを各1名様にプレゼント。棚にちよこんと収まるコンパクトサイズ。※希望の商品を指定してください。



集落活動センター おちめん  
お好みのシフォンケーキ 1名様

写真のクワをはじめ、サクラや味噌、ブランデー、アールグレイ、ほうじ茶、シナモン、ショコラ、炭など好きなシフォンケーキをプレゼント。気になるフレーバーを選ぼう。



とさぶしLINEと友達になって、読者プレゼントに応募しよう!

- 1 スマホから左のQRコードを読み込んで、とさぶしLINE@と友達になる
- 2 とさぶしLINE@より「とさぶしからの贈り物」応募フォームが届く
- 3 応募フォームより、必要事項を明記し、読者プレゼントに応募する

※読者プレゼントの応募は「とさぶしLINE」への登録もしくは、官製ハガキから応募できます。官製ハガキで応募される場合はお名前・発送先のご住所・お電話番号・ご希望のプレゼント番号・クイズの解答・とさぶしを読んでのご意見やご感想、今後見てみたい特集テーマをご記入の上、下記の宛先まで締切日(令和3年6月20日)必着でお送りください。 〒781-0081 高知市北川添10-15 株式会社ほっとこうち

## 宿泊、特産品作り、集落営農を軸に みんなで活発に活動を!

地域への愛着を強く持つ住民が多いという梶原町の越知面地区。今回取材に応じたくれた集落活動センター「おちめん」所属の婦人部「チームシルク」の面々を見れば、それも納得。おちめんが運営する宿泊施設「遊友館」の一角にて、カフェ「くわの実」の営業や地元素材を使った加工品の開発・製造販売を主に担当。クワの葉や味噌などを盛り込んだシフォンケーキは、全国から多くの注文を集める人気商品となっている。また、遊友館は炭窯も構えており、炭焼きのワークショップや自分たちで作った炭を使ったのバーベキューなどを実施。当初は地元で合宿などを行う学生の宿泊利用がほとんどだったが、今では一般客も増えてきたという。また、耕作放棄地を整備する集落営農や地域の見回りなど、地元を守る大きな役割も担う。代表の瀬戸口さんをはじめ、チームシルクの面々と共にシフォンケーキ作りを体験した岡さん。「元気がいっぱいな皆さんにパワーをもらいました!」。



エネルギーな方ばかりで元気をもらいました!



高知大学地域協働学部  
岡知佳さん

もうすぐ大学を卒業し、この春より高知の企業に勤めることになった岡さん。「最後に訪れたこの集落センターでも良い出会いがありました。社会人になってまた帰ってきます」。

### 集落活動センター「おちめん」

高岡郡梶原町田野々1285(遊友館)  
☎/0889-68-0888

独自の新しい試みを取り入れている梶原町。集落活動センターの設立にも積極的に、町北東部に位置する越知面地区にある「おちめん」は、町内で4番目に誕生したセンターだ。開所されたのは平成28年3月で、宿泊を担当する第1部会、特産品作りなどを担当する第2部会(チームシルク)、集落営農を担当する第3部会に分かれて運営。「絆と自立」をメインテーマに、集落同士が支え合いながら積極的に地域活動を行っている。



集落活動センター「おちめん」チームシルク代表  
瀬戸口登貴恵さん

写真のクワをはじめさまざまな種類を用意するシフォンケーキはオンラインショップにて販売中。焼肉のタレや桑茶などの商品開発も積極的に行う。遊友館では炭焼きのほかにピザ焼きなども行っているのぜひ体験を。

A BRAND NEW CHAPTER BEGINS  
TOSABUSHI  
とさぶし

web  
リニューアル!  
見てちゃ!

<https://tosabushi.com>



facebookもやってます!

<https://www.facebook.com/tosabushi>

発行

高知県文化生活スポーツ部文化振興課

〒780-8570 高知市丸ノ内1丁目2番20号(本庁舎5階)

Tel 088-823-9793 Fax 088-823-9296

E-mail 140201@ken.pref.kochi.lg.jp

発行日:令和3年3月31日(季刊)

企画 とさぶし編集委員会

制作 ほっとこうち

### バックナンバーの入手方法

お近くに配布先がない場合は、送料分の切手を送っていただくと、受け取り次第、発送をいたします。

#### 【送料】

1冊 140円

2冊 180円

3冊 215円

4・5冊 310円

6冊以上の場合は、一度ご連絡ください。

お問い合わせ・送付先は、

高知県文化生活スポーツ部文化振興課(上記)まで。



このパンフレットは宝くじの収益金の一部で作成しています。

LINE@でも情報配信中!



とさぶし

と友達になろう!